



三戸町同心町にある観福寺山門。
三戸代官所の門を移築したものと伝わっている。
(2013年4月27日 蔦谷大輔撮影)

江戸時代は、幕府の昌平（昌平坂学問所）や諸藩の藩校、庶民の教育の場としての寺子屋など、さまざまな教育施設が開設された。地域の有志らによって設立された郷学（郷校）もその1つで、藩によって保護や運営の支援がなされた

場合もあった。

三戸町役場の斜め向かいには、三戸町総合福祉センター「ふくじゅそう」がある。この場所には三戸代官所が置かれており、盛岡藩より任命された代官が、現在の三戸町・田子町、南部町のうち旧南部町域と旧名

川町域を中心とした三戸通を支配・管理していた。1865（慶応元年）年12月、三戸代官の大須賀貞明は、盛岡藩の命を受けて、代官所を増築して文武場を開設することを決めた。これは、同時期に、盛岡藩校を文武医3科からなる学校に拡張したことなどに関連し

である。為憲場の教官は、藩校作人館から派遣される場合が多かった。主な教官として、為憲場の規約を作成した藤井又蔵や、作人館の教育理念を打ち出した江幡五郎（那珂通高）らがいる。

8月には、各地の郷学は一時練兵所とすることが藩によって通達された。これにより郷学の教育機能は失われた。奥羽越列藩同盟側についた盛岡藩は、その後、明治政府側との戦闘を経て、同年9月に降伏、藩領の引き渡しと白石（現宮城県白石市）への転封がなされた。この結果、為憲場を含む藩内の藩校や郷学は完全に廃校となった。

三戸の郷学・為憲場

蔦谷大輔

（県民生活文化課
県史編さんグループ非常勤嘱託員）

ており、藩が全藩的な人材育成を喫緊の課題と認識していたことをあらわしている。

さて、三戸では、翌年2

月に文武場が落成し、「為憲場」と名付けられた。四書

五経の1つ『詩経』の一節、「文武の吉甫、万邦憲と為す」（文武兼備の尹吉甫は、

万国の手本である）に由来するもので、文武両道を教育理念として掲げていたの

である。為憲場の教官は、藩校作人館から派遣される場合が多かった。主な教官として、為憲場の規約を作成した藤井又蔵や、作人館の教育理念を打ち出した江幡五郎（那珂通高）らがいる。主な教育内容は、四書五経などの読み書き、漢詩や和歌の修練、剣術や槍術の稽古、医学書の読み書きなどであり、作人館にならって文武医3科を取り入れたものであった。

教育対象は三戸給人に限らず、百姓や商人も受け入れる態勢をとっており、広く有望な人材を発掘し育成することを目指していたようである。

ところが、1868（慶応4）明治元年に入ると、戊辰戦争の影響により武芸稽古の頻度が多くなったよう

で、竹刀などの備品が不足する事態が起きていたという。内戦の時期にあっては、文武医各科の教授方は

継続されてはいたものの、教育面においても軍備重視の方針がとられていたのである。さらに、7月以降、銃隊稽古の願い出が給人らから頻繁に出されており、西洋銃の導入も図られた。

8月には、各地の郷学は一時練兵所とすることが藩によって通達された。これにより郷学の教育機能は失われた。奥羽越列藩同盟側についた盛岡藩は、その後、明治政府側との戦闘を経て、同年9月に降伏、藩領の引き渡しと白石（現宮城県白石市）への転封がなされた。この結果、為憲場を含む藩内の藩校や郷学は完全に廃校となった。

しかしながら、それ以後も、為憲場の建物は、この地に移った斗南藩などに利用され、1873（明治6）年7月、三戸小学（現三戸小学校の前身）の校舎となった。幕末三戸の教育を支えた為憲場は、明治以後も地域教育の場として活用され続けたのであった。